

---

# 咲いた華

ハイリスク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

咲いた華

### 【Nコード】

N1196Z

### 【作者名】

ハイリスク

### 【あらすじ】

それはよくある夏の風景。  
始まりは些細なことでした、  
出会ったのは死神でした。  
思い出したのは優しい記憶でした。  
いきついたのは……  
少女、九条 燐は屋上から飛び降り自殺したはずだった  
しかし、目が覚めて彼女が見たものはあたり一面の白、  
そして運命を変える死神だった。

頑張っ  
て書い  
てます  
、少し  
でも読  
んでも  
もらえ  
れば幸  
いです  
。

それはよくある夏の風景（前書き）

初です！

駄文ですが優しく見てやってください

それはよくある夏の風景

それはよくある夏の風景  
夏休みに入った静かな、  
静か過ぎる校舎の屋上と  
グラウンド。

見下ろし、見下ろされる  
少女

それはよくある夏の風景  
耳鳴りのするほどの蝉の音が  
やむことなく  
響いていた

さよなら

さよなら

もうあつことも無いでしょう

前髪の間隙から見えた君に嗤わらって

言っ

「さよなら」

さよなら

もうあつことも無いでしょう

さよなら

踏み出した足から浮遊感が来る

落下して行く私の体、身体、からだ、  
君に近づいて行く

地面まであと5メートル

君と目があった

口許が弧を描く

ねえ、きみに最期に、言いたいことがあるんだ

「お、ま、え、の、せ、い、だ」

ああ君の顔が、かおが、カオガ歪んで行いく・・・

それはよくある夏の風景

悲鳴を上げた少女の声は

蝉の声と混ざり合い

青空によく響いていた

．．．．．そのままみる

どこかで誰かが嗤<sup>わ</sup>っていた

## 喘う漆黒

私は死んだ

今さつき、屋上から飛び降りて。

原因になった彼女の目の前で。

地面に身体が押し付けられる衝撃。

血が流れ出る生々しい感触。

すべて覚えている、すべて明確に、明瞭に、鮮明に、

なのに、なのに、どうして私は死んでない？

おかしい。

身体には傷ひとつ無い

周りはよくわからない白、白、白

困惑、混乱、

そんな感情に埋め尽くされていた私に急に後ろから声がかかった。

7

「なあ、そこのお前、自殺者だろ？」

ぶしつけに声をかけてきた声は男特有の低い声だった

振り向いた私の目に映ったのは

黒。

驚くほどに真っ黒な髪、瞳をした、男だった。

「おい、自殺者かってきいてんだよ」

男は不機嫌そうに尋ねてきた

「……たぶん、そうです」

私のあいまいな答えに顔を顰しかめながら男は言う



「たぶん、ねえ、まあいい。俺は死神だ。名前はねえ。」  
「・・・しにがみ？」

「そう死神、でお前は間違はなく純度100%自殺者で違いねえ」  
なら聞くなよ、そう思った私は間違ってると思う。

「それで、その死神が私に何か用ですか？」

「あ？・・・ああ用ね、用。俺はなあお前と取引したいんだ」

「・・・取引？」

怪しげな目をする私に男が言う

「そう、取引だ。簡単にいえば俺はお前の魂がほしい」

男が私の心臓あたりを指しながら言う

「タダとはいわねえ。お前の魂もらう代わりにお前の寿命を対価に  
お前の願いを俺が叶えてやる」

「・・・意味がわからないという顔をした私に男はさらに説明を  
していく

「いいか？お前ら自殺者つつうのは本来の寿命をすつ飛ばして自分  
の命

を無理やり終わらせてんだ。

事故や病気とは違う。ありやあ自分の寿命がきて死んでる。

おまえら自殺者の本来の寿命、・・・たとえばお前、お前は今こっ  
して自殺して死んでなけりや

あと70年いきてた

俺の言った寿命を対価につつうのは、その70年というお前の使わ  
れなかつた命を対価に言ういみだ。」

男はそこまで説明すると

私に手を差し出してきた

「なあ、お前遣り残したことがあるだろ？」

やけに確信めいた口調で男が言う

「じゃなきゃ、こんな輪廻の輪の外れのはずれ、こんなところに居  
るはずがねえ」

男が言う

「俺の手をとれ、お前の寿命、活かしてやるぜ？」  
そう言って不適に笑う男の手を

私は、・・・

私はその手をとった。

## アカシックレコード(前書き)

感想などくれるとハイリスクは泣いて喜ぶので  
よかったです

一言でも感想くれると嬉しいです

## アカシックレコード

「さて、これにて俺とお前の取引は成立したわけだ」

男・・・死神はやけに芝居かかった口調で言った

「まあ、とりあえずお前に寿命を対価に言うのがどういう意味なのかももう少し詳しく話す必要がある。」

今度はやけにまじめな顔で死神は私を見る。

私は静かにうなずいて説明を正した。

「いいか、おまえの寿命はこうしている間にも少しづつ減っている。」

意味がわからないという顔をする私に死神は「まあ、聞けて」「そういつて私をいさめてきた。」

「俺の、死神の言う寿命っていうのはな、魂があり続けることができるギリギリまでの時間って言う意味なんだよ。」

「魂の、ギリギリの時間？」

「そう、ギリギリの時間、だ。本来はそのギリギリつつうのは人間が死ぬ時に同じタイミングでくるもんだ。普通に死んでたやつはそのまま魂の寿命が尽きてるから輪廻の輪に組み込まれてまた巡る・・・お前、アカシックレコードって知ってるか？」

私は聞いたことの無い言葉に首を振る。

「・・・アカシックレコード、そいつにはすべての人の歴史、全人類の歴史、宇宙の歴史その過去から未来までが克明に、鮮明に、絶対的に書かれている、絶対的な記録情報、それがアカシックレコードだ。」

壮大すぎる話に少し頭が追いつかず、私は死神の言葉を必死に頭で整理する。

「つまり、世界はそのアカシックレコードに記録されたとおりに進んでいるってことですよね？」

「そう、世界はアカシックレコードに記録された道をたどる、これ

は絶対的で決して狂うことの無い真理であり摂理だ。・・・だがな、たま〜にこのアカシックレコードの絶対的な支配を無視して勝手に現世からバイバイしまっ奴がいるんだよ」

私はその言葉に肌があわ立つような、不快な感覚が背中に走って行くのを感じた。

彼は怪しげに私を見つめて笑う。

「そのバグみたいな存在がお前から自殺者だよ。んで、死神はそのバグを正常に戻すのが仕事なわけ」

「正常に、戻、す？」

「そう、正常に戻す。今もお前は魂が終わりに近づいている。でもな、このまま魂が果てるのに後70年・・・正確に言えば69年と364日と12時間ある。

ぶっちゃけそんな長い時間バグを野放しになんてできねえ、最初は小さなバグでも時間がたてばどこに影響してくるか、わかったもんじゃねえからな。

そこで登場するのが死神だ。死神は何十年っていう寿命を対価としてバグの願いを叶えてやることで魂を強制的に終わらせるんだ。

ここまででは、わかったか？」

正常にもどす、その意味することが何なのか、私はカラカラに渴いた口で問う

「わかった、でも、正常に戻すって、具体的に・・・どう、するの？」

死神はいやらしくワラツタ。

「壊すんだよ跡形もなく圧倒的に破壊的に。そうするとな、アカシックレコードはあいた穴を埋めるために代わりを作る。お前という存在はすべてというすべてから消えるんだ。

お前がであった人、家族、いつか出会うはずだった友にも、彼氏やらにも、お前の代わりになったやつが出会い、物語を続かせるんだ。ようは、必要なのはつじつまをあわせるための存在なんだよ」

私は呆然と死神を見やった

「なにほおけてんだ。自殺したんだから今も、過去も、未来も、もうお前のものじゃあないんだよ。当たり前だろ？おまえが要らないって言ったんだからよ」

「そんなことっ・・・」

「反論なんてやめてくれよ？めんどくせえ。

それより説明の続きだ。いいか？寿命を対価に願いを叶えるつつつても限界つてもんがある。たとえば死んだやつを生き返らせたり、たとえば誰かを殺したり、だな。

まあ、その辺考えて有効に寿命をつかえ。」

私は死神の言葉をただただ、聞いていた。

私は、私は別に世界から消えたかったわけじゃないんだ。ただ、あの場所に居たくなくて、でも誰にも見向き去れないのも寂しくて、だからあんな風に、あの子の、彼女の記憶にこびりつき、残るように、彼女の脳裏に死ぬまで焼け付くように、彼女に後悔を、彼女に最悪を、彼女に私の味わった地獄を理解、いや、痛感してもらっために、彼女を呼び出し、これ見よがしに自殺をした、・・・してやっただ。

始まりはきつとこじだった(前書き)

カラオケに行きたい。

## 始まりはきつとこだった

始まりは些細なことだった

私、九条 燐は普通の中学生だった。

普通のどこにでもいる中学生、友達はほどほどにいて、親友も一人いて、両親の仲もまあまあ、そんな平凡な人間、それが九条 燐という人間だった。

夏、蝉の音がうるさい夏休み真っ只中のこと、わたしは親友の三上 牧に彼女の従兄弟のお兄さんの、相模 蓮さんの経営している喫茶店に連れて行かれた。

蓮さんは気さくな人で、私も牧も、本当のお兄さんのように慕っていた。

喫茶店につくと牧は私のほうをむいて、

「燐、誕生日おめでとう！」

と私に大きな花束を差し出しながら言ってきた。

その時私は牧が、明日の私の誕生日の前祝いをしていているということが、しばらく理解できないでいた。

少して状況が飲み込めると、じわじわと嬉しいという気持ちがあふれてきた。

だらしなく顔が緩んだ。

牧と蓮さんは店の奥からケーキをとりだしてきて、私に差し出してきた。

少し形がくずれているのは、おそらく牧が何か失敗でもしたのだから。

意地っ張りで不器用な彼女が私のために必死につくってくれたのだと思うと、私の顔はまただらしなく緩んできた。

ありがとう、ありがとう、と私は何度も言った

蓮さんが苦笑しながらおめでとう、と私の頭をなでてくれた。



しばらく騒ぎ倒して、時間が過ぎていつて、帰る時間になり、私と牧は帰りの準備をしていた。

「隣ちゃん」

蓮さんが私の名前を呼びながら、小さな袋を私に差し出してきた。中身は背中に天使の羽がついたクマのかわいらしいストラップで私はまた、ありがとうございます、ありがとうございますと何度も言った。

蓮さんは苦笑しながら

「ははっ、かわいいなあ俺の妹は」

と私の頭をなでてきた。

蓮さんはわたしをからかったりするとき、私のことをよくふざけて妹、といってくるのだ。

「蓮さん、ふざけないでください！」

口でいいながらも蓮さんの手を頭から離さないのは、私自身彼を兄のよう思っているからだろう。

幸せだった。

当たり前の日常が。

幸せだった。

永遠に続く、そう信じて疑わなかった。

家に帰って、次の日に家族に祝われて、

幸せだった。

それは陽だまりの中でまどろむような、

暖かい海の底にしずんでいくような、

眩暈のするほど幸せな、シアワセな、しあわせな毎日だった。

一週間ほどして、夏休みが終わった。

毎年夏休みの残り一週間は一気に宿題をやるのが私たちの通例だったので、牧とあつのは一週間ぶりになる。

クラスの中で彼女の姿を見つけ、私は一目散に彼女の元へ向かった。

「牧っ」

私は牧に声をかけた。

牧は、—— 牧は私に一瞬だけ目を向けると、すぐに目をそらし、いつもは近づかない派手な格好をしたいいわゆるギャルのような子達のもとへ行行ってしまった。

その日、牧は一度もわたしの方へ来てくれなかった。私から近づこうとしても牧はそれとなく私を避けて、けっきょく一日中、会話すらすることすらなく学校は終わってしまった。

帰りに誘おうとしても、牧は今朝のギャルたちのほうへ行ってしまう、私を見てくれることはなかった。

次の日も、その次の日も、それは同じだった。

コレが私の非日常の始まりだった。

シアワセだった、

しあわせだった、

幸せだった。

何が、いけなかったんだろう？

ねえ、牧・・・・・・・・・・

なにが、どうして、なぜ、いったい、どうして、なぜ、なぜ、なにが、どうして、だって、だって・・・・・・・・わからないよ牧、わからないんだよ。牧牧牧牧まき、まきま・・・・・・・・き・・・・・・・・まき！！ 混乱、困惑、思いが混ざり、ぐちゃぐちゃになった感情の波にのまれていく・・・・・・・・

ああ・・・・・・・・どこかで

始まりのコールが聞こえた。

舞台はある中学校、

役者はそろった

幕は上がった

物語は終わりへ進む

坂に転がる石が止まらないように

物語は加速する

ゆっくり、ゆっくり

最期にむけて……

歯車が狂い始めたのはいつたいつなのかな、ねえ、牧。

答えの無い問いをわたしは繰り返して絶望した……

始まりはきつとこじだった(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます！  
感謝感激 です！！

## 軋む齒車

牧が私を避けるようになってしばらくして、異変は起こった。少しずつ、少しずつ、周りの人たちが牧と同じように私を避けるようになっていった。

始めは牧とあの時からつるんでいる派手な子達、次にそれを面白がって男子生徒の一部が、おとなしい子たちは巻き込まれたくないから、と私に近づいてくる人はいなくなった。

そしてその波はじわじわと広がり、学年全体に広がっていた。

そしてその波は立ちの悪いことにその威力をあげていった。

……いじめだ。

ストレスのたまった中学生にはちょうどいい発散方法だったのだろう。

学年全体から無視されて、避けられている、助けるやつなんかいない。助けようなんて誰も思わない。

ていのいい玩具おもちゃ

はじめは足を踏まれたり、陰口をたたかれるくらいだったものが、日を重ねていく内に内容はどんどん過激になっていった。

歩けば必ず誰かにぶつかられ、教科書やノートは隠され、ボロボロになって帰ってくる。

私の悪口をいっぱい書いたノートをこれ見よがしに見せられたり、黒板に私のケータイのアドレスが書いてあって「私と遊んでね」と書かれていた時など泣きたくなくなった。

いじめの主格は牧とあの派手な子達のグループだった。

牧は私がおかされたり、言われたりする時、無表情で私を見つめていた。

まるで、「お前なんか最初から親友なんて思ってたなかつた。」  
そう言われているようで、私は彼女の顔を見るたびに目の前が真っ暗になるような感覚に襲われていた。

・・・家族にはいじめなんて言えなかつた。

いじめにあっている自分が恥ずかしくって、惨めで、もし知られたら父も母も私にきつと幻滅する、そう思った。

母も父も私のことを愛してくれると思う。でも、私の母は昔から完ぺき主義のきらいがあつた。

たとえばテスト、私が始めて80点台をとつた時、母は眉を少ししかめた後、

「燐ちゃん、次はがんばりましょう。大丈夫よ、お母さんの子だもの、きつと出来るわよ」

そう笑顔で私に言うのだ。

たとえばピアノ、コンクールで私はぜんぜん賞が取れなかつたのに、近所の子が特別賞を取つたという話を聞いた時、母は家で私に

「燐ちゃんなら次はきつともつといい演奏が出来るわよ。頑張りましょう」

そう少しひきつた笑顔で言った。

父はいつもそれを苦笑してみていた。

きつと母は私に過度な期待を、自分の理想を押し付けられないように、自分なりに感情を抑えてくれたのだと思う。だから私は今まで平気だつた。

母の理想に完璧にそうことは出来ないことがあつても、それなりに頑張つて、それなりにいい結果を出せば、母は

「さすがお母さんの子ね」

そう言つてわたしを褒めてくれた。

……だからこそ、いじめ、なんて絶対言いたくない。今まで母の期待にギリギリで応えてきた。いじめなんて母の理想からかけ離れすぎたこと言えばきっと幻滅される、見放される。そうとしか思えなかった。

私はまだ中学生で、余裕なんて無くて、日々続いてく非日常が、日常になって何も出来ないまま現状を受け入れるしか出来ない子供<sup>ガキ</sup>だった。

何も出来ない。

そんな状態が一年ほど続いた時、自体は変化の時を迎えた。

それは夏休み前の

蝉が鳴き始めた、べたつく空気の日差し**の強い日**のこと……

狂った歯車がキシツ、と嫌な音を立てたのがどこかで聞こえた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1196z/>

---

咲いた華

2011年12月11日15時53分発行